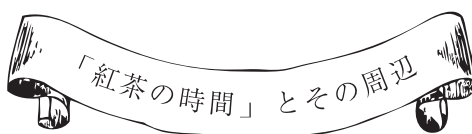


きもちは、 言葉を さがしている



第 26 話

水野 スウ

原始林窯さん

11月にはいってもあいかわらず私の、けんぽうかふえ・おはなし出前の旅は続き、参院選の後からはじめた「紅茶の時間」内、憲法と憲法草案を学ぶ毎週の「草かふえ」も、回を重ねながら続いています。

けれどその話は今号はちょっとわきにおいて、かわりに、栃木は那須烏山で40年近く、普段使いのお茶碗やお皿など、焼きもののづくりをされている原始林窯さんこと、げんさん小稟さんご夫婦のこと、書こうと思います（こんな時、連載のサブタイトル「紅茶の時間とその周辺」という文言の、なんと使い勝手のよいこと！）。

紅茶の時間で2年に一度ひらく、原始林窯展。2002年からスタートし、今年で8回目を数えます。毎週ただ何気なくあいている静かな「紅茶の時間」空間が、この2日間だけはすてきなアートギャラリーに変身するのです。

毎回、新旧の紅茶仲間が、げんさん小稟さんの器を見に、何より二人に逢いたくて、二人と話したくて、入れ替わり立ち替わり紅茶ギャラリーにやってきます。



原始林窯の、初個展

今から35、6年前のこと。げんさん小稟さん夫婦のはじめての個展が、金沢の喫茶店でひらかれました。当時、私はその近所に住んでいて、そのお店が行きつけの場所だったことから、たまたま二人の初個展に遭遇し、その時にうつわを一つ買ったことがご縁のはじまり。

その後、私に娘が生まれ、生後百日のお食い初めの食器を二人に頼んでつくってもらいました。それから、げんさんがお墓まいりで金沢に帰って来た時、わが家にも寄ってくれたり、夫婦ぐるみのおつきあいが、自然なかたちでずっと続いている。そしてある時、「ねえ、今度は紅茶の時間で個展をしませんか」、と私から提案をして、2年おきの原始林窯展が、2002年から紅茶ギャラリーではじまった、というわけです。

幸せな食器屋

日本の伝統的な文様を、小稟さんが職人技で手描きしたそばちょこは、紅茶の時間に一度でも来たことのある人なら誰もが知っている定番のお湯のみですし、我が家で毎日使っているご飯茶碗もお皿も、飽きのこない絵柄で、どれも使いやすく、洗いやすく、しかも割れにくい、暮らしの中のすぐれものです。

それに加えて原始林窯さんの最大の特徴は、こちらから出すどんなわがままな注文もいとわずに、世界に一つしかない、オリジナルのお皿やお茶碗をつくってくれること。

この大きさのこのお皿に、今は亡きうちの犬と猫を描いてほしいの、という注文（これは私です）や、ある人は、大きな手術の後、少しずつごはんの量がふえてきた夫に、それとわからないくらいほんの少し大きめのごはん茶碗をつくってもらいたい、と。または新築祝いに、家族全員の名前とそれぞれの好きな花を描いた揃いのお皿を、とか、孫が生まれたので、その子の名前入り小さなお茶碗を、

とか、これと同じお皿でどこかに私だけのしるしを入れてつくってください、などなど。あ、今、こんな風を書いてみて、わがままな願いはどれも、注文主の、その時々暮らしや家族のかたちを反映しているってこと、気づきました。

そんな原始林窯さんなので、紅茶ギャラリーでも、世界に一つきりの、お茶碗やお湯呑みを少しずつ買い足していく人がふえました。

原始林窯さんは、自分たちの仕事を正式には、陶磁器製造業、と呼んでいます。まちがっても、陶芸作家、ではない。

同業の人からは、奇跡の食器屋、といわれているとか。陶芸教室も持たず、入賞をめざしての作品づくりもせず、他のバイトもせず、ただひたすらお客様のリクエストを細かくきき、もちろんそれに定番のうつわも制作しつつ、普段使いの食器づくりだけをなりわいに生活できている焼きもの屋さんって、この業界では本当に稀な存在なのだそうです。

でもそれはあくまでも周りの人が言っていること。二人はただ、うつわを手にした人のよろこぶ顔や、使う人のしあわせを願いながら、わがままな注文をできるかぎり叶えたいと、焼きものづくりに励んでいるだけ。そして、自分たちって本当になんてしあわせな仕事させてもらってる食器屋だろうね、と夫婦してよく言いあっているのだそうです。



小稟さん、山道でおじさんと会う

原始林窯展@紅茶ギャラリーがオープンする日、とりわけ、みなが楽しみにしているのが、小稟さんのトークタイム。

小稟さんの、実に自然体な語りくちのおはなしは、どれも実際にあったことをただそのまま話しているだけなのだけど、どうしてこうもめっちゃおかしく、楽しく、不思議で、しあわせなきもちにさせてもらえるのだろう。思わずひきこまれて聴き入ってしまいます。昔ばなしをくり返しせがんでちっとも飽きない子どものように、紅茶ギャラリーでも、同じ一つの話なのに何度聴いてもその度おかしくて、その場にいるみんなで笑いあって、しあわせを共有するのです。

今年の小稟さんのおはなしは、遠野からはじまりました。

5年半前の東日本大震災のあと、岩手や福島をはじめ、東北——とりわけ津波の被害が大きかった三陸海岸沿い——を訪ねることの多くなったげんさんと小稟さん。今年5月には、げんさんが前々から行きたがっていた、遠野の六角牛神社へ行くことになりました。

その神社に通じる山道が細くて、どうも車で通れそうにありません。肺の丈夫でないげんさんには少々きつい山道、彼は車で行ける別の道を探すことにして、小稟さんは一人そのまま、ひっそりしたきもちのいい森の中の道を登っていきました。

すると道の先に、黒いヤッケをきた小柄なおじさんが、山菜採りでしょうか、腰をかがめている背中が見えてきたのです。

以前、畑仕事中の耳の遠いお年寄りに、近くで声をかけてびっくりさせてしまったことがあった小稟さん。また驚かせちゃいけない、と、こんにちわ～、こんにちわ～、と声をかけながら、おじさんに近づいていきました。

5、6メートルほどそばにきた頃でしょうか、やっとそのおじさん、こちらをふりむきました。……

あれれ？ 見ればその顔はまっ黒、耳が二つとも立っていて、鼻筋が長～くて、何より全身真っ黒い毛だらけで……。あっ、おじさん、人間じゃなかった、おじさん、クマ、だったのね……。

目と目があって、だけど小稟さんには不思議と恐怖心も驚きもなく、クマおじさんのほうもただ、きょとんって顔してて。



その瞬間、小稟さんはこう思ったそうです。自分もこの年まで生きものをいっぱい食べてきたから、もしここでクマに食べられちゃったら、それも運命、それはそれで、まあしょうがないか。

よく見ると、そのクマはどうも子どものよう。もしかすると近くにお母さんグマがいるかもしれない、そうなるとおおごとになってしまいそうで、それはあんまりよくないな。そこで、互いに、あれーっ？？って見つめあったまま、小稟さんは、しーっと言いながら、そっとそーっとあとずさりしてその子グマから離れていきました。

ええ～！？ ちょっと待ってよ、どうして怖くなかったの？ どうして食べられてもしょうがない、なんて思えたの？ 話を聴いていたみんなから、口々にそんな声があがりました。

まさか野生のクマに出会えるなんて予想もしてなかったけど、その時ちっとも怖さを感じなかった自分の反応に、小稟さん自身も、実は驚いていたそうです。

生まれかわり

小稟さんは、これまで何度もハチに刺されてきました。クマンバチにもスズメバチにもアシナガバチにも。このつぎ刺されたら命に関わるよ、とお医者さんに言われながらもまた刺されて、その度に腫れはするけど、それでも死なないで無事に生きている。

「きっと前世の自分はハチに悪さをするクマで、そのせいでこんなに攻撃されるのかも。そんなふうにこれまでずっと思っていて、そうしたらほんとにクマと出会えた。だからちっとも怖くなかったのかな、いや、それとも単に私がよっぽど鈍いってことかなあ？」

いやいや、ふつう、なかなかそうは思わないんじゃない？ 前世で自分はクマだったかも、だなんて！

ですよねぇ、うふふっ、と、小稟さんもおかしそうに笑います。

「でもきっとこんなふうに思うのは、小さい頃からおばあちゃんの口ぐせをよく聞いていたせい。前世のおまえは虫だったかもしれないし、石ころだったかもしれないよ。次はウシに生まれかわるかもしれないんだよ。そんなことをしょっちゅう言われていたから、ひとも動物も虫も、どっちがえらいかじゃなくて、みんな一緒のレベルで、何かは何かの生まれかわりで、いのちは巡っている。輪廻、っていう言葉はその時まで知らなくても、なんとなくそれを自然なことって受けとめてたんだと思う」と、小稟さんは言うのです。

小稟さんが子どもだったころの家には、いろんな動物たちがいました。ウシもウマもヤギもヒツジもブタもお蚕さんもいて、全員が家族のような感覚で暮らしていました。ブタの赤ちゃんが生まれると、幼い小稟ちゃんはその赤ちゃんを抱いたまま、干し草の上で一緒に眠ることもありました。

ニワトリもたくさんいて、おばあちゃんが、こーこー、と呼ぶと、エサをくれる人だ、ってわかるからたちまち一斉に寄ってくる。お祭りの日など、

その中から、もう卵をうまなくなった老いたニワトリをつぶすのも、おばあちゃんの仕事でした。

中の一羽を抱き上げ、その頭をなでながら、おばあちゃんがクイッと首をひねると、そのニワトリはケツとって、おばあちゃんの腕に抱かれたまま少しも苦しまずに、むしろうっとりしたような表情で息の根が止まる。

そういうことを幼い時から当たり前に見て、育ってきた小稟さん。家族のように暮らし、こんなにかわいがって育てたブタも、人間に殺されて、食べられる。自分はそういう生きもののいのちをこれまでいっぱいたべてきた、その確かな実感が、小稟さんのからだの中にはあるのです。



東北に通うということ

そもそも、二人が東北によく行くようになったのは、2011年の大地震の後のこと。

あの震災で、げんさん小稟さんの自宅ギャラリーにあったやきものは、その9割がこなごなに砕けました。原始林窯の、窯そのものも壊れました。焼きもののづくりをこれからも続けていけるかどうか、全く先の見えない日々には襲われたのです。

地震直後のしばらくは、水もない電気もない、だから原発が爆発したことも知らない。その中で必死に、小稟さんは屋根にのぼり、瓦をのせ、屋根を修理しました。瓦職人に頼んでいたらいつ来てもらえるか、見当もつかなかったからです。

しばらくの間、げんさんは、食べることも笑うこともできないほど落ち込んでいましたが、自力でどうにかこうにか窯を直し、これでまたやきものが作れるかもしれない、という再出発地点に立てたところからやっと、なんとか食べものを口にできるようになったそうです。

東北のことが気になりながらも、体を張ってのボランティアは、げんさんにはとうてい無理、ならばその地を度々訪ねることも、ささやかながら自分たちのできることだ、と思った二人。そうやって通いはじめた東北の旅が、不思議なことに、げんさんをどんどん元気にしていく。そしてまた、長く一緒に暮らしてきた小稟さんを、新鮮に発見していく、そんな旅でもあったそうです。

鹿踊り

今年の9月、げんさん小稟さんは再び、遠野の六角牛神社を訪ねました。神社の秋の例大祭に奉納される、鹿踊りを見るためです。

六つの角の牛、と書いて、ろっこうし。その角は、シカかうシか、またはイノシシか、クマ、でもあるらしい。その動物たちはまた、神でもあるらしい。

かつて、動物と人間は、闘って殺し殺される関係でした。殺したもののたちに生かされているいのち。どちらかが殺されて、また別のものに生まれかわるなら、もしかしたらそのシカは、自分だったかもしれない。または自分が、ウシだったかもしれない。鹿踊りは、そういう循環がわかるお祭りだ、と小稟さんは言います。

金沢生まれのげんさんにとっては、いのちが循環するという考え方も、遠野の鹿踊りも、遠野物語の世界も、そして、震災以来よく旅するようになった東北そのものがまったくの異文化で、そこにとても惹かれて、わくわくするそうです。

一方、福島県の中通りがふるさとの小稟さんに

は、遠野の祭りも物語も、自分の生まれ育った世界と根っこがつながっている感じがして、いたって当たり前のことに思えるのでした。

東北の旅を重ねながら、げんさんは、小稟さんの中に、自分とは違う文化が脈々と流れていることをあらためて発見し、小稟さんは小稟さんで、これまで当たり前すぎて気づかなかった自分の文化のルーツを、げんさんのおかげではじめて認識することができるようになったということです。



小稟、という名前

この日のトークの中で、小稟さんは自分の名前の由来についても語りました。本名ではなくて、結婚後に、げんさんのお母さんがつけてくれた名前であること。「稟」の字は、神様から分けていただくもの、という意味があって、それが「小」さいので、「小稟」とは、神様からほんのちょびっと分けていただいたもの、の意味だと小稟さんは思っていること。

生きていく中で、いいことも悪いこともみな、神様からの授かりもの、という受けとめをする小稟さん。動物も作物もひとみな対等で、何かの生まれかわりとして巡り巡っている、とずっと思ってきた小稟さん。

彼女のそんな生き方と、自分たちの身に起きた

さまざまなできごとを、そのまんまのみこんで、受け入れていくように思える東北の人たちの生きる哲学とは、やはりどこかで重なっているように、げんさんは感じるのです。そんな東北に通い続ける中で、げんさん自身がまた、不思議な元気をわけてもらえているのだと。

文様は祈り

小稟さんが細い筆で描く、日本の美しい文様の数々。麻の葉、青海波、七宝、砥草、唐草、矢羽根、格子、市松、亀甲、麦藁手……。どの文様にも、一つ一つ意味の違う、祈りがこめられているのだそうです。

今、これだけの細かな手仕事のできる職人さんって、この国では、きっともう、そう多くはないでしょう。

使う人のしあわせを願いながらいつも文様を描くの、そういう小稟さんの書いた「文様は祈り」という美しい文章で、今回のおはなしを締めくくりたいと思います。

(2016.11.19)

文様を描いている時、その間中、祈っている気がします。古くからある古典文を描いている時、淡々としたリズムの中にすっかり心が静まり、手だけが勝手に動いているかのような一瞬があります。その時、無限の世界（宇宙のような）と繋がっているような不思議な感覚になる時間です。

以前、作品展に来てくださった老師様が、描いた鉢の文様をご覧になって、「まるで写経のようだ」とおっしゃったのです。その時、やはり文様は祈りだと、確信しました。

——小稟

